

「男と女の創造」

2020年10月14日

また、神である主は言われた。「人は独りでいるのは良くない。彼にふさわしい助け手を造ろう。」(創世記2章18節)

こういうわけで、男は父母を離れて妻と結ばれ、二人は一体となる。人とその妻は二人とも裸であったが、互いに恥ずかしいとは思わなかった。(創世記2章24節～25節)

神は、土の塵で人(アダム)を造り、鼻に命の息を吹きかけ、生きる者とした。そして、エデンの園に置き、地から生えた木の実を食物として与えた。神は、人を見て、「人が独りでいるのは良くない。彼にふさわしい助け手を造ろう」と言われた。神は全ての創造において「良し」とされたが、人が独りでいるのは「良くない」と、創造の未完成さを認識された。人を神のかたちに、即ち、人格的に対話する存在として創造されたので、人も対話する相手がいて、初めて「良し」とされるのである。神との対話ができるが、それは上なる方との対話で、対等な相手の必要があると思われたのである。神は、野の獣、空の鳥を土で形づくり、人の所に連れて来た。人はそれぞれに名を付けた。人が、野の獣、家畜、空の鳥に名を付けると、生き物の名となった。名を付けるということは支配下に置くという意味である。人は生き物に名を付け、生き物を治めることになった。ところが、野の生き物は、人格を満たすほどの対話の相手にならなかった。ふさわしい助け手にはならなかった。そこで、神は人を深い眠りに落とし、あばら骨の一つを取り、肉で塞いだ。そして、人から取ったあばら骨で女を造った。深い眠りの中で女が創造されたので、人は他者に対しては、見えないことが多い。素材となったあばら骨は「側面」を意味する言葉である。神は、女を人の所に連れてきた。人は女を見て、「これこそ、私の骨の骨、肉の肉」と歓喜の声を上げた。神のように上を見上げて対話するのではなく、また、ペットのように支配する関係でもない。対等な立ち位置で対話できるパートナーとしての女を見出したからである。人間は他者と共に生きる者であることを明示している。人は神の前に一人で立ち、同時に、隣人と共にある存在である。主イエスは、神との、また、隣人との関係が罪によって破れている現実に対し、自らが十字架で死ぬことによって、罪を赦し、正しい関係に修復する福音を啓示してくださった。聖書のテーマは、これに尽きる。人はまた「これを女と名付けよう。これは男から取られたからである」と言っている。人は女を見て、男になったのである。男はヘブライ語で「イーシュ」で、女は「イッシャー」である。語呂合わせで、両者が極めて緊密な関係になったことを表している。「男は父母を離れて妻と結ばれ、二人は一体となる。」男と女は結婚関係に入る。その時、男は両親から自立した男性であることが求められる。二人は一体となったが、なにもかも一緒ということではなく、互いの人格を尊重する一対という意味である。「人とその妻は二人とも裸であったが、互いに恥ずかしいとは思わなかった。」結婚した二人には、恥ずかしく、また弱点もあるが、それらを認め、互いに受容し合う関係を築いたということである。

女の創造に関し、「助け手」、男の「あばら骨」から、男の後に造られた等から、女は補助的存在のように記述され、フェミニストから、厳しい批判が出されている。聖書は一貫して、男性優位の立場で書かれているので、フェミニストの主張に首肯できる。ただ、「助け手」は、神を「我らの助け(詩編33:20b)」と歌っているので、上下の関係ではなく、男と女は互いに助け合う関係に成熟することが肝要ではではないか。